

資 料

プロサッカー選手のキャリアチェンジ

役割卒業理論 (Role Exit Theory) を援用して

久保田洋一*・野川 春夫**・未永 尚*・重野弘三郎***

Career Transition of "Ex"-Professional Soccer Players
Role Exit of Professional Soccer Players

Youichi KUBOTA*, Haruo NOGAWA**, Naofumi SUENAGA* and Kozaburo SHIGENO***

Abstract

With the phenomenal success of the Japan Professional League, the so-called J-league in 1993, tens of thousands of kids have dreamed to become a professional soccer player. However, the league has not been stable and a number of players have been forced to retire at a relatively young age each year. These players tend to suffer from the loss of self-identities, fame and financial resources at their prime time. To become an "ex" in twenties and thirties is sociologically unique and most athletes usually exit their occupations involuntarily. So the purpose of this paper is to determine the viability of Drahota's modified role exit model for Japanese ex-professional athletes. This research project was a replication of Drahota (1996) and Drahota & Eitzen (1998). The research methods and procedures of this study were identical to their studies. A total of 30 ex-professional soccer players were invited to this study. In order to examine an ex-athlete's file of role transition, the researchers conducted a face-to-face, in-depth interview. Researchers carried out the purposive and snowball sampling techniques and conducted the interviews from July of 1999 to January of 2000. The length of professional career of the sample subjects varied from one to 17 year. The interviews with the ex-professional soccer players revealed that Drahota's modified role exit model was generally viable to the role exit of the Japanese players and supported the findings of Drahota (1996) and Drahota & Eitzen (1998). Most players developed little occupational skills or prepared their retirement, the role transition of ex-athletes to a new career, during their playing days. Within the limitations of this study, some conclusions were drawn as follows: 1) younger prospects ought to be taught how to prepare their second career prior to their professional career; 2) the league ought to provide more significant second career guidance or workshops for their players; and 3) professional teams ought to develop a written clause which requires a player attend the career guidance or workshops.

1. 緒 論

1993年に開幕したJリーグと、同年のワールド

* サッカー研究室
Soccer Seminar** 生涯スポーツ国際比較研究室
International Comparative Study of Sport for All*** ランジャ京都スポーツアカデミー
Academy of Spors, Laranja Kyoto

カップサッカー米国大会最終予選における「ドーハの悲劇」が社会現象となったのを発端として、1998年フランスワールドカップへの初出場や、シドニーオリンピックへの代表チームに対する国民の関心の高さも極めて高いものとなっている。Jリーグは、当初10チーム合計359人の登録選手¹⁷⁾でスタートした。1998年度シーズンには参加チームが合計18チームに増加し、登録選手は489人²¹⁾

に拡大するなか、最近では10代後半から20代前半の選手達の活躍は目覚ましく、各年代の代表チームの殆どの選手達がプロ契約をしている。このように若手選手が台頭し、華々しい活躍の中でケガや体力の衰え、或いはチームの構想から外れて引退を余儀なくされる選手も数多くいる。

Jリーグの開幕は1993年だが、選手のプロ化への動きはそれよりも8年早い1985年に始まっている。

スポーツに限らずプロとは、主に観客を集めた興行の収益から報酬を得るために商品価値としての側面を持ち、顕在的な存在のため青少年などに対しての「ロールモデル：お手本」を演じることも求められる。しかし競技種目や年齢に関係なく、何らかの理由で選手としての商品価値が低下したり、選手自身が自信を喪失した時にプロサッカー選手という職業から引退し、プロスポーツ選手という役割から卒業しなくてはならない。

年功序列の会社社会と比べるとプロサッカー選手という職業は、収入や知名度などで派手な社会的脚光を浴びる反面、経済的・社会的・心理的な安定性が極めて脆弱で大変リスクの高い職業といえる。また、プロ選手としての役割から次の職業の役割を習得しなくてはならない。だが、この役割移行には、経済的・社会的・心理的な痛みやトラウマが伴うことから、スムーズな役割移行(Role Transition)が難しいことが報告されている。

そこで本研究の目的は、Drahotaら³⁾の理論モデルを用いて、元プロサッカー選手がセカンドキャリアを獲得するまでにどのような社会心理的過程を辿ったかを明らかにすることとした。

2. 日本サッカーにおけるプロ化の歴史的背景

旧西ドイツにおいて、すでに日本人プロサッカー選手の第1号として活躍していた奥寺康彦と、日本国内で活躍していた木村和司の両名が、プロ選手と同義語のスペシャルライセンス選手として登録することを日本サッカー協会から承認された。当時行われていた日本サッカーリーグ(以降JSLと略す)1986-1987年度シーズンからプロ

選手として登録し、リーグ戦を戦った。これが日本国内におけるプロサッカー選手の始まりであった。

当時のJSLは、まだアマチュアリーグとして、選手は会社に所属し、仕事とサッカーを両立させる生活を送っていた。この2人のスペシャルライセンス選手登録が他の選手に波及し、プロ化に対する気運が高まり、翌年から増加の一途をたどり、Jリーグが始まる以前までに選手のプロ登録を認めていたリーグは、ジャパンフットボールリーグ(以降JFLと略す)を含め、チームおよび選手は6年間(1986年シーズンから1991年シーズン)で21チーム、368名に達した¹²⁾²¹⁾。

3. 大学サッカー選手の夢と現実

サッカーの強豪大学に所属する大多数のサッカー部員はJリーガーを目指し、そしてその大多数がその後のことを考えていない。彼らは、異口同音に「先の事は解からない。その時になって考える。」と。しかし、彼らの希望は概ね一致している。それは指導スタッフやスカウト、球団フロント等で一生サッカーに関わって行きたいという希望である。だがその希望も、ごく一部の者しか進めない狭き門である事も承知している。

一般職として企業に就職した会社員も、プロスポーツ選手も仕事は実力勝負という点では共通だが、決定的な違いは、後者は組織から与えられた仕事を遂行して行く上で、やがて体力的に限界が訪れ、その仕事を全うする事が出来なくなるという事である。

この事は世界のプロスポーツ選手共通の宿命であり、ポジションによって多少の差はあるが、サッカーのような肉体的消耗度の激しい競技の選手生命は精々10年である。

順天堂大学の卒業生を見るにつけて、引退した選手がその後に希望通りの職種や、やりがいのある仕事につけるかどうかは、現役時代をどのように過ごしたかにかかっていると言える。第二の職業に就くための養成機関や支援組織が公的にも私的にも未整備なことを承知の上、少なくともプロに慣れた段階で、可能な限り第二の職のための準備

を始めるべきである。

Jリーグの前身であるJSLでは、所属先の会社側が、選手の私生活、仕事の理解力、プレー振り(リーダーシップ、フェアプレー、マナー、ひたむきさ等)を観察して現役引退後の配属先を決めていたようである。この点からすると、プロ選手に対する評価は球団やマスコミ、ファンがしており、ある意味ではJSL時代よりも厳しく評価されているはずである。

プロ選手はプレーではもちろん、人間的にも私生活の面でもアマチュア選手の範たるべき存在でなければならない。勝ちさえすれば他に何をやっても良いという姿勢では、引退後の職探しはかなり厳しいものになるのである。プロ選手としての10年間、ひたすらに努力し、チームの勝利に貢献し、なお且つ、来るべき引退に備え、何か資格を取るために勉強を続ける事である。そのような姿勢が結果的に素晴らしい人間性の成長をもたらし、アマチュア選手の尊敬を受け、目標とされる存在となるのである。

4. 先行研究の紹介

プロスポーツ選手の引退に関する研究は70年代半ばから始められ、80年代から90年代にかけて数多くの研究¹⁾¹⁰⁾¹¹⁾が発表された。理論的な主流としては、引退には加齢が伴うという老年学理論(Gerontological Theories)¹⁴⁾、選手を引退することは「社会的な死」を経験することだとする死観学理論(Thanatology)¹⁶⁾の2つのパラダイムが中心となって研究が進められてきた。だが、スポーツ選手の引退過程が現実を引き起こす諸問題に対して老年学理論や死観学理論では説明力が弱いという批判が高まり、スポーツからの引退は人生の移行期の一部であり自然な移行過程とする過度期・ライフコース理論(Transition and Life Course Theories)を援用する傾向がみられている⁹⁾¹⁹⁾。これらの研究者が言及している点は、スポーツ選手という職業から別の職業への移行において、役割期待や役割行動の転換がどの程度スムーズに出来るかという点であり、言い換えると役割理論の援用が示唆されていると言える。

日本におけるスポーツ参加者のセカンドキャリア研究は、海老原ら⁴⁾⁵⁾⁶⁾や植松ら²⁰⁾及び前田ら¹³⁾が、スポーツキャリアを職業としてとらえたわけではなく、競技種目の移行に着目した研究である。これに対して中込ら¹⁵⁾は、プロサッカー選手のキャリア移行に関する研究の中で、諸外国におけるキャリア移行援助プログラムの紹介と共に、日本国内における関連分野に関する研究の取り組みの遅れを指摘している。また、豊田ら²¹⁾は、スポーツ選手には一般の中年期に訪れる危機と類似した心理的特性(体力の衰え、取り巻く環境の変化、転職等)が存在し、それらが早く訪れるために自我同一性の再確立がスムーズにいかないため、専門的介入のよりどころとなるべきキャリア移行援助プログラムが必要であると指摘している。

このような研究の流れの中で、DrahotaとDrahota & Eitzen³⁾はEbaugh⁷⁾のRole exit theoryを用いて米国プロスポーツ選手のセカンドキャリアへの到達過程の実証研究を行っている。Role exit theoryは直訳すると「役割出口理論」となるが、自分がこれまで演じてきた役割を修了するという意味をもつことから「役割卒業理論」として本論を進める。

この役割卒業理論は、従来の役割を卒業し、次の新役割を取得するまでの役割移行期に焦点を当て、その移行プロセスを段階別に説明しようとするものである。その論理的基礎となるのは役割理論であり、プロスポーツ選手のように突然の役割の終焉という出来事を迎える職業を論理的に説明するうえで、役割卒業理論は有効性を発揮すると考えられている。

本理論は、いわば過度期・ライフコース理論を役割理論に援用して、これまでの理論的な欠陥を補完している。そこで、本研究ではこの役割卒業理論の枠組みを用いて、日本人プロサッカー選手の引退からセカンドキャリアへの移行について明らかにすることを試みる。

5. Role Exit Theory (役割卒業理論)

Role exit理論の論理的基礎となるのは役割理論であることは前述した。役割理論は、人間があ

る地位をしめたとき、その地位に付随して期待される諸行為のセットとしての役割を対象に、役割期待、役割認知、役割評価、役割遂行(役割演技)あるいは役割葛藤といった概念を使って論理化するものである。Role exit 理論もこの構造は同じである。この理論の一般化をめざした Ebaugh⁷⁾は、役割移行期を4ステージに区分し、各ステージに見られる特徴を明らかにすることにより、Role exit 理論の構築をはかった(図1参照)。

本研究で用いる Role exit 理論の4ステージとは以下の通りである。

- ・第1ステージ(First doubt)：プロスポーツ選手である自分に対する疑問・不安。
プロ選手としてどれだけ長くプレーできるのかといった不安や、選手自身が自分の能力に限界を感じ、選手生活に疑問を感じ始める段階である。
- ・第2ステージ(Seeking alternatives)：プロサッカー選手以外の代替職業の模索。
第1ステージで疑問・不安を体験後、次の職業の選択肢を模索や考慮し始める段階、いわば、引退後の生活に向けた準備段階である。
- ・第3ステージ(The turning point)：戦力外通告または契約の終了による転換期・分岐点。

次の職業への選択が迫られ、熟考を要する転換期。Ebaugh⁷⁾は、転換期には本人の意思決定と社会的なサポート(特に、家族と友人)が必要であるとしている。スポーツの世界では通常チーム側から戦力構想外として解雇されるので、転換期は不本意であると Drahota ら³⁾は述べている。

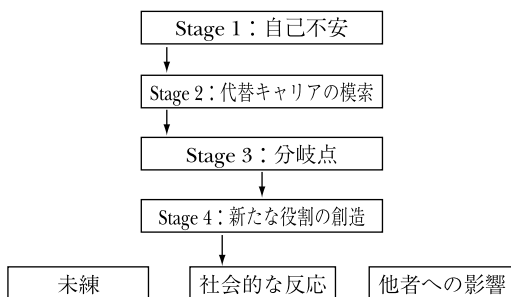


図1 Ebaugh's Role-Exit model

- ・第4ステージ(Creating the Ex-Role)：“元”選手という役割の創出と新役割の創造。

このステージでは、役割の変化を適用される他の見通しを越して新たなものを作り出す。だが、引退するということは、特定のグループやメンバーを持たないということとは異なる。現在の役割と今後のアイデンティティを結びつけるのであるが、この時に二つの役割において軌轢やジレンマが起こるのである。

Ebaugh の Ex-Role Theory をアメリカのプロスポーツ選手にあてはめて研究したものとして、Drahota & Eitzen の「The Role Exit of Professional Athletes」が挙げられる。Drahota ら³⁾は、プロスポーツ選手のセカンドキャリアに到る移行の実証研究から、プロ選手という職業に入る前段階で自分自身がプロの社会で通用するか否かの不安に襲われる時期を発見し、Ebaugh の Ex-Role Theory の4ステージの前に予備ステージ(Pre Stage)を追加する必要性を示唆した。そして、Drahota ら³⁾は、Ebaugh の Ex-Role Theory に予備ステージを加えた5段階の Role Exit Theory を修正モデルとして提唱した(図2参照)。

従って本研究の目的は、Drahota ら³⁾の Role Exit Theory を援用して、日本人プロサッカー選手たちのキャリアチェンジを明らかにすることとした。

6. 研究方法と手順

1) 調査対象及び抽出法

1986年から1998年度シーズンまでの13シーズンに、日本国内のサッカーリーグで引退した日本人プロサッカー選手は720名であった。引退した選手は、日本サッカーリーグ(JSL)、ジャパンフットボールリーグ(JFL)、そしてJリーグに登録した合計39チームに所属していた。1シーズン平均、48名の選手が引退していた。引退選手の推移としては、Jリーグ以前が32名、Jリーグ以降は88名にのぼり、この数年間100名前後の選手が毎年引退しセカンドキャリアの獲得に迫られている¹⁸⁾。

本研究では、プロサッカー選手を「チームとの

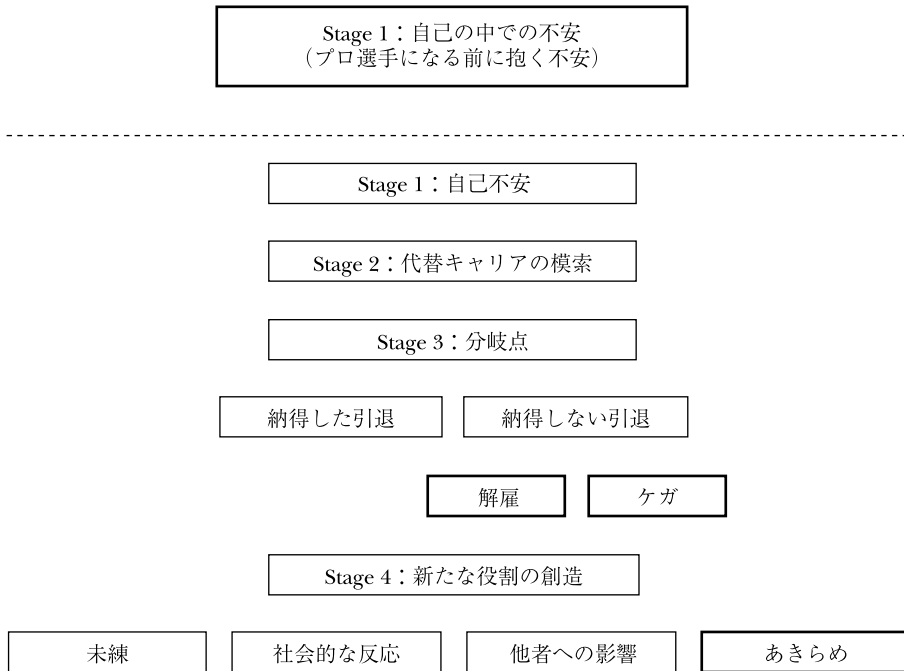


図2 Modification of Ebaugh's model to fit Professional Athletes

契約，もしくは日本サッカー協会による統一契約書を交わし，日本国内のサッカーリーグ（JSL, JFL, Jリーグのいずれか）にかつて選手登録をした経験を有する日本人」と定義した．そしてこのプロ契約制度に基づき，現時点でプロ契約していない元プロサッカー選手30名を本研究の対象者として有意に抽出した．なお，かつて外国籍を有し日本に帰化した元プロ選手は含んでいない．

2) 調査対象者の抽出法

調査対象者の抽出方法は，Drahotaら³⁾の雪だるま式抽出法（Snowball sampling）という任意抽出法を踏襲した．雪だるま式抽出法は，面接に同意してくれたサンプルに知り合いの元選手を次々に紹介してもらってサンプルを増やす方法である．これは，サッカーに限らず元プロ選手の所在が不明な場合が多いため，理想的なランダムサンプリングの手法が適用できないからである．また本研究では，雪だるま式抽出法に加えて，Jリーグ選手協会及び順天堂大学サッカー部などの協力

で，元選手の所在を調べてコンタクトし，30名（高卒10名，大卒20名）のサンプルを確保した．サンプルの引退後経過年数は，1年から12年であった．本サンプルの最終学歴，現役プレーヤーとしての活躍年数，および代表歴等については表1に示されている．

3) 調査方法と資料収集の手順

調査方法：直接面接法，ならびに電話調査法を用いて調査員2名が，元プロサッカー選手への個別面接を実施した．調査員は，Jリーグの元プレーヤーで現役の大学院生と大学4年生の女子学生であった．調査対象者への連絡手順および面接方法については，本研究者が念入りなトレーニングを行ってから本面接を実施した．面接所要時間は1人あたり30分～90分，電話調査では20分～30分であった．

調査内容：Drahotaら³⁾が設定した質問項目の41項目を用いた．但し，実際の面接では，41項目の質問を順番に尋ねていく方法ではなく，サンブ

表1 サンプルの属性

選手	最終学歴	契約の経緯	現役年数	代表歴
A	大卒	大学 プロ	7	
B	高卒	社会人 プロ	7	
C	高卒	社会人 プロ	4	
D	大卒	社会人 プロ	4	
E	大卒	大学 プロ	1	×
F	大卒	大学 プロ	4	×
G	大卒	社会人 プロ	3	
H	高卒	高校 プロ	3	×
I	大卒	社会人 プロ	6	
J	大学中退	大学 プロ	5	
K	大学中退	大学 プロ	3	×
L	大卒	社会人 プロ	9	
M	大卒	社会人 プロ	4	
N	高卒	高校 プロ	10	
O	高卒	社会人 プロ	10	
P	大卒	社会人 プロ	7	
Q	大卒	大学 プロ	3	×
R	大卒	大学 プロ	7	×
S	大卒	大学 プロ	7	
T	高卒	社会人 プロ	7	
U	大卒	大学 プロ	4	
V*	大学中退	大学 プロ	17	
W	大卒	大学 プロ	5	×
X	大卒	大学 プロ	2	×
Y	大卒	大学 プロ	7	
Z	高卒	高校 プロ	2	×
Aa	大卒	社会人 プロ	4	
Bb	大卒	社会人 プロ	12	×
Cc	高卒	高校 プロ	2	×
Dd*	高卒	高校 プロ	15	

全日本代表
年代別の代表, ユニバーシアード
年代別の代表, ユース

× なし

ルがサッカーに関与し始めた頃から引退するまでの出来事を語ってもらう想起法を用いながら, その中で Role exit 理論の4ステージに関連する部分を詳しく聞き出していくようにした. この個別面接法は, Drahota²⁾, Drahota ら³⁾の用いた資料収集手法を踏襲した.

調査期間:平成11年7月から平成12年1月の6ヶ月間を調査期間とした. 個別の直接面接法では, 被面接者に了解を得て会話をテープに録音し, その後テープ起こしを行って文章化した. 文章化したデータは, Drahota ら³⁾の Role exit 理論の4ステージに当てはめ, 日本人プロサッカー選手のセカンドキャリアへの移行について明らかにすることを試みた.

7. 主な結果

雪だるま方式によってコンタクトのとれた‘元’プロサッカー選手30名に直接面接法を用いて, プレステージからステージ4に到るまでの社会心理的な推移を明らかにしたのが表2である.

プレステージ「プロになる前の不安」

‘元’プロ選手たちが, プロ選手として契約をする以前にどの程度不安を抱いたか否かを質問した回答を記号で表した. 印は, プロ契約以前に明確な不安を抱き, プロ選手としての契約に躊躇したサンプルである. 印は, 不安はあったが, プロの世界に強く惹かれ, その不安を打ち消すだけの希望と自信を抱いて入団したサンプルである. ×印は, 自分の実力にほとんど不安を持たず, 積極的にプロ選手になりたいと望んでいたサンプルである. また, 印は, このステージには無頓着であったためコメントをしなかったサンプルである. いわゆる不安を抱かなかったサンプルである.

表2から明らかのように, 不安を抱いたサンプルと抱かなかったサンプルは15名づつであった. プレステージで不安を強く抱いてプロ選手になることを躊躇したサンプルは4名, 11名は自分の実力に不安を覚えていた. これに対して, 他の11名はプロ選手として自信を持ってプロの世界に飛び込んでいったといえる. 最終学歴別では, 大卒の6割が不安を抱いていたのに対して, 高卒は4割

表2 キャリアチェンジへのステージ別推移

プレステージ		ステージ1	ステージ2	ステージ3	ステージ4	ステージ外
選手	プロになる前の不安	自己不安	代替キャリアの模索	分岐点	新たな役割の創造	未 練
A	×			ケ ガ	会社経営	×
B	×		×	ケガ・体力限界	コーチ	
C	×		×	体力の限界	コーチ	
D				ケ ガ	コーチ	×
E			×	人間関係	一般会社	
F				人間関係	フロント	
G				解 雇	フロント	
H				年 齢	サッカー教室	×
I			×	ケ ガ	政治家	×
J				人間関係	会社経営	
K				解 雇	コーチ	
L				体力の限界	会社経営	
M				解 雇	コーチ	
N				ケ ガ	コーチ	
O				体力の限界	会社経営	×
P				年 齢	教員	
Q	×			解 雇	トレーナー	
R				人間関係	コーチ	
S				自己判断	コーチ	
T	×		×	ケ ガ	コーチ	
U				解 雇	コーチ	×
V				年 齢	コーチ	
W				ケ ガ	トレーナー	
X	×			解 雇	コーチ	
Y		×		ケ ガ	コーチ	
Z	×		×	解 雇	コーチ	
Aa	×	×		解 雇	コーチ	
Bb	×			自己判断	コーチ	
Cc	×	×		解 雇	サッカー関連	
Dd	×		×	解 雇	コーチ	

凡例 有り, 具体的なもの有り, 自ら行動
 少々有り, 考えたが行動していない, 行ったが自らではない
 × 無し, 考えていない
 コメント無し

しか不安を感じていなかった。

ステージ1「プロ選手としての不安」

プロの世界で生きていく中で、けがや加齢、人間関係などの単一-或いは複合的な理由でレギュラーから外されたり、チーム構想から外されて引退に追い込まれる選手を目の当たりにする。第1ステージでは、実際にプロ選手となってみて、選手自身や他の選手のこのような状況を見るにつれて「プロ選手として続けていく不安」を感じる段階である。

は、引退後のことに対して明確な不安があった者、は、明確ではないにしろ、何かしら不安を感じていた者、xは、考えなかった者である。学歴に関係なく、程度は違っても8割強の選手が自己不安をもっていた。怪我や移籍、解雇などの何らかのきっかけで不安を実感した選手と、漠然とした不安を常に頭の片隅に入れていた選手がいた。どちらも、プロサッカー選手という職業の不安定さは意識していた。

ステージ2「代替キャリアの模索」

このステージは、引退後のことを見据えて次の職業選択を実現化するために、何らかの行動を起こしたかどうかである。は、引退後のことを見据えて具体的な行動をとった者である。は、引退後を見据えて何かしようとは思ったが、実際には行動を起こしていない者である。xは、引退後に備えて何もしなかった者である。

代替キャリアの模索として、最も多い行動はサッカーの指導者ライセンス獲得に向けた知識の向上であった。しかし大半の選手が自己不安を感じながらも約1/3は、何も模索をしていなかった。特に、高卒の選手の半数が、全く行動を起こしていなかった。

また、何かやらなくてはいけないと思いながらも、実際には何もしていないサンプルが見受けられ、なんらかのきっかけ作りやガイダンスを設定する必要性を示唆している。

ステージ3「分岐点」

このステージでは、引退の引き金となるものがあるか否かで判断した。全ての選手に分岐点が存在し、中でも年齢や体力を理由とした解雇通告が

多く、続いてケガの発生が主な分岐点となっていた。また、監督やコーチとの人間関係の悪化を分岐点として挙げたサンプルも4名いたが、いずれも大卒と大学中退の選手であった。

基本的にプロサッカー選手は、競技特性上、肉体消耗度が激しいため、年齢による体力低下やケガによるレベル低下が、直接・間接的に分岐点に結びついている。また、現在の日本のプロスポーツの雇用システムが単年度契約のため、年度の終盤で解雇を言い渡されると、心理的だけでなく社会経済的にも不安定になるため、キャリアチェンジを円滑に行うことだけの時間的猶予がないのである。

ステージ4「新たな役割の創造」

引退後、どのような職業に就いたかについてまとめた。また、このステージでは、キャリアチェンジに伴う新たなアイデンティティの獲得とともに、「元」プロサッカー選手というアイデンティティを背負うこととなる。分岐点が来ると、キャリアチェンジは待たないであるが、代替キャリアの模索が不十分であったり、分岐点の訪れが急であると新しいアイデンティティはどちらも身につけてこない。

約8割の「元」選手達が、コーチやフロントなどのサッカー関連の職業についているが、彼らの大部分はチームから要請を受けたり、他者から紹介されるなど受身的なキャリアチェンジであった。これまでの、特技、知識、ヒューマンネットワークを活かしてサッカーの世界で生きていくことを意思決定していた。本サンプルの特徴としては、「コーチ」「フロント」等の特異性が強いキャリアチェンジとなっていたが、職業としてのコーチに関しては需要と供給の関係から考えると、次世代の選手達の選択肢にはなかなか入りえない。

ステージ外「未練」

引退後に、「元」選手としてのアイデンティティにどのくらい未練があったかをこのステージでは明らかにしようとした。未練とは、Drahotaら³⁾の Role exit 理論の第4ステージの延長線上にあり、選手達の社会心理的な推移状況を表現したものである。セカンドキャリアのアイデンティテ

ィの獲得がスムーズにいくと、'元'プロ選手としてのアイデンティティにしがみ付かなくともよいのであるが、'元'プロ選手のアイデンティティはむしろ周囲の人間によってもたらされるので、選手時代を振り返る「未練」がなかなか消えないのである。

は、明確な未練を自覚している者である。は、全く未練が無かったわけではないが、ある程度は納得した者である。xは、あまり未練を感じていない者である。面接調査では、あまり未練を感じていないと述べた選手が7名いたが、時間の経過とともに未練が薄れているだけで、全く未練のない選手は皆無であった。特に、解雇された選手達は、初めは戸惑い、途方にくれ、自問自答の日々が続いたと述べ、プロ選手としての自分のアイデンティティを否定された分岐点での心理的、社会的、経済的なダメージから立ち直るのに、多くの時間を費やしていた。そして、'元'選手としてのアイデンティティから脱却するのに多大な時間を要することを示唆しており、新たなアイデンティティの創造を手助けするなんらかのきっかけ作りやガイダンスを設定する必要性を示唆していた。

8. 考 察

以上の結果から'元'プロ選手が、ステージ毎にどのような意思決定をおこなってきたのかを垣間見ることができた。特にJリーグが存在しなかった時代にプロサッカー選手であった人たちは、ほとんどが会社員からのキャリアの転換を図っていた。本サンプルの面接結果から、学歴よりもプロ選手になる前の職業体験の有無が、プレステージの存在に関係を及ぼすことが示唆された。具体的には、プロ入り前に疑問や不安を強く持ったのは、すべて社員選手からプロに転向した元選手であり、Drahotaら³⁾のRole exit理論修正モデルと似通っていた(表1参照)。これに対して、Jリーグ発足後にプロ選手となった人たちは、プレステージを体験することが少なく、Ebaugh⁷⁾の述べたEx-Roleモデルに近い傾向を示していた。現在のJリーグでは、高校や大学から直接プロに転

向する選手が大勢を占めているため、日本人プレイヤーには、Ebaugh⁷⁾のEx-Roleモデルを基本とした修正モデルが適していると考えられる。

一方で、学校卒業と同時にプロ契約を結んだE選手、S選手、Z選手のような3名の元選手は、引退後のことをまったく考えていなかった。Drahotaら³⁾が述べているように、日本人のプロ選手もその時のゲームや自分のプレーなどの「現時点：今に集中し」、「その一瞬のために生きる」特徴を示しており、引退後の身の振り方などを意に介さない生活を送っていた。このような選手の典型的な例が、セカンドキャリア獲得に時間を要した4名(E選手、T選手、Z選手、Dd選手)である。E選手とZ選手は、あまりにも短い期間で解雇されたための不完全燃焼である。Z選手は、全日本代表まで経験しながらケガで戦力外通告を受け、まだできるという無念な気持ちなが長く払拭できなかった。また、Dd選手も全日本代表を経験し、現役生活が長すぎたため却ってサッカー選手という職業から転換できなかった。彼らの共通点は、現役中にサッカー以外の職業に関しての模索もしなかったため、キャリアチェンジに時間がかかるとともに、'元'プロ選手のアイデンティティの未練からなかなか抜け出せずにいた。

これに対して、現役選手の間にセカンドキャリア獲得の取り組み(代替キャリアの模索)をおこなっていた選手達は、セカンドキャリアにスムーズに移行したケースが見られた。例えば、A選手は、複数年契約で移籍したチームでケガをしたが、引退後の人生を明確に設計し会社を設立している。また、P選手のようにシーズン途中で教員採用試験を受験し、学校教員に転向したケースもある。P選手の場合は、やや特別な例であるが、そのプロセスは実に用意周到で、決して偶然で獲得したキャリアではないことは明らかであった。この2人のケースでは、複数年契約という共通の要因があり、複数年契約が二人の選手に“余裕”をもたらせていた。日本のプロスポーツ選手の契約形態は、単年度雇用契約が主であるが、これは雇用する球団に有利なだけで選手の身分保障やキャリアチェンジへの準備には不利といえる。

また、スポーツ選手は選手自身が資本であるために、シーズン途中で具体的に他の職業を獲得する準備に取り組むことは難しいかもしれないが、可能性のあるセカンドキャリアの情報入手を選手が自主的に進めたり、所属チームやリーグ自体がセカンドキャリア獲得のきっかけ作りやガイダンスを選手達に設定する必要性も示唆された。

9. 結 論

本研究の目的は、Drahotaら³⁾のRole Exit Theoryを援用して、日本人プロサッカー選手のキャリアチェンジを明らかにすることとした。‘元’選手30名の直接面接の結果から、以下の結論が導き出された。

- 1) プロに送り込む高校や大学あるいはユースチームの指導者による、選手へのキャリアチェンジに関する事前教育と啓蒙の充実が必要であること
- 2) 選手自身のセカンドキャリアへの意識を向上させるためのきっかけ作りやガイダンスのサポート体制をリーグまたは選手協会が構築すること
- 3) 選手自身が、積極的にセカンドキャリアを模索するガイダンスやプログラムに参加することを雇用契約条項に明記すること
- 4) 複数年契約の推進とオフシーズンに大学や大学院の講義を受講できるシステム作りの促進

参 考 文 献

- 1) Curtis, J., Ennis, R.: Negative Consequences of Leaving Competitive Sport? Comparative Findings for Former Elite-Level Hockey Players. *Sociology of Sports Journal*, 5: 87-106, (1988)
- 2) Drahota J. A. T.: The role exit of professional athletes. Unpublished Doctoral Dissertation, Colorado State University, (1996)
- 3) Drahota J. A. T., Eitzen, D. S.: The role exit of professional athletes, *Sociology of Sports Journal*, 15: 263-278, (1998)
- 4) 海老原修, 横山文人, 池田 勝, 武藤芳照, 宮下 充正: 一流競技者のキャリア・パターンに関する研究 大学威信の影響について, 日本体育学会第36回大会号, 142, (1985)
- 5) 海老原修, 横山文人, 池田 勝, 宮下充正: 年代別に見る一流競技者のキャリアパターンの特徴, 日本体育学会第37回大会号, 130, (1986)
- 6) 海老原修, 横山文人, 池田 勝, 宮下充正: 一流競技者のセカンドキャリアに関する研究, 日本体育学会第35回大会号, 126, (1984)
- 7) Ebaugh, H. R. F.: *Becoming an Ex, The process of role exit*, Chicago, University of Chicago Press, 247, (1988)
- 8) Ebaugh, H. R. F.: *Out of Cloister, A study of organizational dilemmas*, Austin, TX: University of Texas Press, (1977)
- 9) Greenforfer, S., Blinde. E.M.: "Retirement" from Intercollegiate Sport: Theoretical and Empirical Considerations, *Sociology of Sport Journal*, 2: 101-110, (1985)
- 10) Lerch, S.: The Adjustment to Retirement of Professional Baseball Players, in *Sociology of Sport: Diverse Perspectives*, edited by Susan Greenforfer and Andrew Yiannakis. West Point, NY: Leisure Press, 138-148, (1981)
- 11) Lerch, S.: Athletic Retirement as Social Death: An Overview, in *Sociological Imagination*, edited by Nancy Theberge and Peter Donnelly. Fort Worth: Texas Christian University Press, 259-272, (1984)
- 12) Lever, J., (亀山佳明, 西山けい子訳): サッカー狂の社会学, *ブラジルの社会とスポーツ*, 世界思想社, 212-218, (1996)
- 13) 前田博子, 川西正志: 女子サッカー選手のスポーツキャリアパターン 日本女子サッカーリーグ選手について, 鹿屋体育大学研究紀要, 12, 41-48, (1994)
- 14) McPherson, B. D.: Sport Participation Across the Life Cycle, *Sociology of Sport*. 1, 213-230, (1984)
- 15) 中込四郎, 松本光弘, 田嶋幸三, 豊田則成: プロサッカー選手のキャリア移行に関する研究, 平成8年度プロフェッショナルスポーツ研究助成報告書, 筑波大学大学院修士課程体育研究科, 45-54, (1998)
- 16) Rosenberg, E.: Athletic Retirement as Social Death: Concepts and Perspectives, in *Sociological Imagination*

- tion, edited by Nancy Theberge and Peter Donnelly. Fort Worth: Texas Christian University Press, 245-258, (1984)
- 17) サッカーマガジン：ベースボールマガジン社，411, 156, (1993)
- 18) 重野弘三郎：プロサッカー選手のセカンドキャリア到達過程に関する研究 Role Exit Theory に着目して．修士論文，鹿屋体育大学，(2000)
- 19) Swain, D. A.: Withdrawal from sports and Schlossberg's model of transition, *Sociology of Sports Journal*, 8. 152-160. (1991)
- 20) 植松秀也，海老原修：一流競技者のスポーツキャリアに関する比較研究 第9回・第11回アジア大会日本代表選手を対象として，日本体育学会第42回大会号，159, (1991)
- 21) 豊田則成，中込四郎：運動選手の競技引退に関する研究，自我同一性の再体制化をめぐって，*体育学研究*，41, 192-206. (1998)
- 22) 日刊スポーツ社：1999年度Jリーグプロサッカープレイヤーズ名鑑，154, (1999)

(平成13年12月12日 受付)
(平成14年3月30日 受理)